



Title	シャルル・フーリエにおける「系列」と「観念」の形成にかんする試論：「文明のカーストおよび垂カーストの階梯」を中心に
Author(s)	大塚, 昇三
Citation	経済學研究, 65(1), 167-182
Issue Date	2015-06-11
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/59493
Type	bulletin (article)
File Information	ES65(1)_167.pdf



[Instructions for use](#)

シャルル・フーリエにおける「系列」と「観念」の形成にかんする試論

——「文明のカーストおよび亜カーストの階梯」を中心に——

大塚昇三

I. はじめに

フーリエは「惑星の物質面の後退」と題された草稿で、惑星同士の関係や動植物の象徴的な意味といった、まるで詩か神話のような宇宙論をいつもの調子で論じたあと、その一節の末尾に一人称でこうのべる。すなわち、私はこれまで自由派や人民の友、政論家、観念学派の学者たちといった人びとに盾突いてきた。けれども盾突いた分だけかれらの思い込みから私は自由であった。かれらはじつに横暴で、自分たちの意に反する思想はゴアの宗教裁判をものぐほほどに迫害する、と。こういったお決まりの同時代批判に続いてフーリエは、自分に思い込みがないおかげで新しい学問に出会い、この学問がたくさんの新しい観念をもたらしてくれたのだという。さらに、観念学派の学者らは観念を分析はできるが観念そのものを生みだせずにいる、とかれらを揶揄する。そのいっぽうで、自分のなかにはナイル川の源流にたとえられる「観念の貯蔵庫」があって、そこから観念がいくらかでもでてくる、というのである。その部分を引用しよう¹⁾。

「観念学は観念を分析はできても、おおいに役立つのに手つかずの領域で観念を生みだすことができない。…(中略)…われわれが良い観念を思いつけるのであれば、その観念がどこからやってくるかなどたいした問題ではない。金銀のありかを知ってはいるけれど一銭も持ち合わせがないというより、金がどこからでてくるのか知らないけれど、とにかく金をたくさん持っているというほうが良いではないか。観念にかんして私はこんな具合いだ。新しい観念がどこからでてくるのかわからないけれど私には観念がたくさんある。私の観念の貯蔵庫はまるでナイル川の源流のようだ。その源流はだれにも知られていないが、それでもナイル川の水を豊かにもたらしてくれる。けれども、そんな源流がひろく世間に知れわたって華々しく命名されようものなら、[]の源流のように、小川のせせらぎまでも涸れてしまうのである。」([]内は原文空白)

ここにみられる観念の貯蔵庫という表現には考えさせられる。引用箇所最後の文など、原文の欠落もあって解釈はむづかしい。大河の源流もその所在が知れわたってしまえば涸れてしまう。それと同じように、もしフーリエの観念の貯蔵庫が白日の下にさらされてしまえば、もう観念は湧いてこなくなるということだろう。それは、たとえば観念の貯蔵庫は、フーリエのいわば識域下であって、それを意識化してしまえば観念の湧出はとまってしまうということ

1) Fourier, Charles, "Détérioration matérielle de la planète," *Manuscrits de Fourier* publiés dans *La Phalange. Revue de la science sociale*, Paris, t.VI, 1847, pp. 503-504. ここで本稿の表題にある「文明のカーストおよび亜カーストの階梯」という訳語について一言のべておく。その原語は *Échelle des castes et sous-castes civilisées*. である。これについては本

稿の第Ⅲ節で具体的に説明するが、この *sous-castes* は *castes* の分類上の下位区分に相当し、したがって *sous-castes* の訳語は「下位カースト」などよりも「亜カースト」としたほうが、フーリエの博物学分類へのこだわりが表現できるだろう。

か。その意味するところはいまひとつはっきりしない。本稿の課題は、草稿のこの箇所の意味を筆者なりに考えることにある。

この課題に取り組むにあたってまずフーリエの根本にある思想をみておこう。フーリエは情念が世界をかたちづくると考える。これがかれの根本にあるもっとも重要な思想である。いささか手の込んだ考え方だが、その意味はこうである。すなわち、もし人間が情念にしたがって自由に行動すれば情念の引力と斥力がはたらいて人びとは集団を形成する。そのさいかならず中心になる集団と、この中心集団に反発する二つの極集団が中心集団の両側に、中心集団を挟み込むように形成される。この二つの極集団はたがいに協力して中心集団と競う関係になる。この中心と両極の構造をフーリエは集団系列

(la série des groupes) またはたんに系列 (la série) とよぶ。それは、情念が、情念みずからの存在や働きを、人間の集団形成の行動を通して系列構造という目にみえるかたちであらわす、ともいえよう。そして神がこの系列の構造を原型 (type) ないし鑄型 (module) にして世界のいっさいをかたちづくる。情念が自由に発揮されるなら、いっさいが系列構造を分有して統一がうまれ、世界は調和する。情念が抑圧されると系列構造に歪みが生じ、統一が乱れて世界は不和におちいる。これがフーリエの根本思想である。

じつはフーリエが枚挙する「系列」には4種類あるが、本稿ではかれの著述のなかで出現頻度の高い「混合系列 (la série mixte)」をとりあげる²⁾。この混合系列の集団区分の名称を簡略

化して図示しておこう。

上昇翼集団
中心集団
下降翼集団

こうした区分と名称は、たとえば軍隊の部隊配置などをモデルにしたようである³⁾。これら三つに区分される集団のそれぞれの人員数が、たとえば5人、6人、7人というような数列で表現される。「原型」(type) とはおおむねこうした数字の配列をさすと理解してよいだろう。これらの3集団の配置を系列の基本構造としてフーリエは「中心と両極」または「中心集団と両極集団」とよぶことが非常に多い。

ともあれ、フーリエによれば、神は、かならずこの構造を原型として、いいかえれば系列を鑄型 (module) にもちいて物質に働きかけ、いっさいをこの同じ鑄型で構造化して運動を生みだしているという。だから物質界、すなわち動物界、植物界、鉱物界といった当時の博物学でいう三界にあっても、そして精神界にあって

著作については以下、UU, t.IV, *Œuvres*, t.V と略記する。本稿ではこのアントロポ版全集に収録されている著作については、この全集版を使用し、ページ数はこの全集版のものを記す。なお、著作を表記するさい、著作の原題の略記号とアントロポ版全集の巻数とを併記する。翻訳のあるものについては適宜その書誌情報と頁数を記す。ただし訳語は必ずしも既刊の日本語訳によっていない。ここでフーリエの著作からの引用について一言のべる。フーリエは同じ論点について複数の著作ないし草稿で繰り返し説明する。複数の著作にまたがる説明は補完的な関係にある。だから筆者が原著から引用する場合、適当な説明を選択すると引用箇所が複数の著作にまたがることになる。しかしそれは決して文脈を無視したものではない。

2) Fourier, Charles, *La Théorie de l'unité universelle*, Paris, t.IV, 1841, *Œuvres complètes de Charles Fourier*, Paris, éditions anthropos, t.V, 1966, p. 313 sq. この著作は、フーリエの生前には *Traité de l'association domestique-agricole*, Paris et Londres, 1822, 2 vols. として刊行されたが、死後、『普遍統一の理論』と改題され、これがアントロポ版全集に収録されている。この

3) Fourier, Charles, *Théorie des quatre mouvements et des destinées générales*. 3^e édition, Paris, 1846. *Œuvres*, t.I, p. 293. なお、この初版は1808年に公刊されている。この著作については以下、QM., *Œuvres*, t.I. と略記する。巖谷國士訳『四運動の理論』(下), 現代思潮社, 1970年, 173頁。

も、いっさいのものが系列の構造特性をそなえることになる。フーリエの言葉をそのままひけば「原子にはじまり天体にいたるまで、いっさいが人間の情念の特性をあらわす絵巻になる」わけである⁴⁾。フーリエのこうした思想にかんする、かれの著述にそった説明は第Ⅱ節にゆずらう。

このようにフーリエは、神が系列を鋳型に付かって物質にはたらきかけ、いっさいの運動を生みだしているというのだが、じつは、まさしくフーリエ自身が系列を鋳型にしてさまざまな観念を成形し、それを記述しているのである。フーリエは、自分の主張の鍵となるいくつもの観念を図や表にまとめ、それらをパッチワークのようにつぎはぎして著述を進めていく。その図や表には上記の系列の構造が明確にみられる。そうした図表のなかでもっとも重要な「社会運動の推移表」は、惑星の寿命とされる8万年を、誕生して成長し死にいたる人間の生涯になぞらえて、細かくは32に区分される社会形態の変遷で、さらにいえば惑星の終末後にそれらの再生を予想させる周期をもった変遷であらわす⁵⁾。また、「大階梯ファランジュ」は未来社会の構成単位である1,620人規模の共同体ファランジュの、年齢と性格の分類におうじた成員の集団区分をあらわす⁶⁾。この二つの図をみくらべてみても、そこには共通した構造がみられ

る。表現に多少の違いはあるものの、前者には「上昇振動、幸福の絶頂、下降振動」といった時間の流れの区分があり、後者には「上昇翼、中心、下降翼」といった集団の基本区分があつて、ここに上記の系列の構造が確認できる。

こうみてくると、フーリエの「観念の貯蔵庫」には、じつは観念ではなく、いわば事物の認識パターンとして「系列」が内蔵されているのではないかと推測したくなる。フーリエはこの「系列」を「鋳型」にして外界から得られたさまざまな情報を分類・編集し、つぎつぎに観念を成形している、と考えられないだろうか。

とはいうものの、「社会運動の推移表」や「大階梯ファランジュ」を論じる文脈で、それらの図と系列の構造との対応関係にかんする直接的で具体的な言及はほとんどみあたらない。だが、理想社会における幻想を駆使した情念の均衡を論じる文脈で、文明批判のひとつの事例として挿入される「文明のカーストおよび亜カーストの階梯」にかんしては、このカースト区分と系列の構造との対応関係に言及する箇所が「共感」をあつかう草稿のなかにあつた。

そこで本稿では、「文明のカーストおよび亜カーストの階梯」をとりあげ、フーリエが論じるカーストの階層構造と系列構造との対応関係を、草稿の説明から確認する。この確認作業をもって、フーリエが観念を成形するとき、系列の構造を鋳型にして情報を分類・編集していること、そしてフーリエのいう「観念の貯蔵庫」には観念ではなく「系列」が内蔵されていて、かれはこの系列を原型ないし鋳型にして観念をつぎつぎに成形していた、とする筆者の解釈の傍証としたい。

なお、この課題への取り組みの準備として、まず第Ⅱ節では、いま簡単にみた「系列」の内容をフーリエの宇宙論の記述にそって検討する。第Ⅲ節では「文明のカーストと亜カーストの階梯」の全体像を具体的にみる。最後の第Ⅳ節では「系列」と「文明のカースト」との対応

4) *QM., Œuvres, t.I, p. 32, n.b.* 巖谷國士訳『四運動の理論』(上), 現代思潮社, 1970年, 66頁。

5) *QM., Œuvres, t.I, Voir "Tableau du cours du mouvement social."* inséré entre les pages 32 et 33. 巖谷訳, (上), 巻末の折込参照。

6) Fourier, Charles, *Le Nouveau monde Industriel et sociétaire*. 2^e édition, Paris, 1845. *Œuvres, t.VI*, pp. 110-111. なお、この初版は1829年に公刊されている。この著作については以下、*NMI., Œuvres, t.VI.* と略記する。田中正人訳「産業的組合的新世界」(抄訳), 『オウエン, サン・シモン, フーリエ』世界の名著, 続8巻, 所収, 中央公論社, 1975年, 559頁(訳注)。なお、この巻末にも「社会的運動の推移表」(田中訳)が織り込まれている。

関係をフーリエの草稿における記述で確認する。

II. 宇宙論と「系列」

本節では、「はじめに」でみた、情念が世界をかたちづくっているとするフーリエの根本思想を、かれの宇宙論や情念論の記述にそって検討し、かれの思想のなかで「系列」がになう重要な役割ないし意味合いを確認する。

その作業にはいる前に、フーリエの宇宙論が、かれの著作のなかでどういう位置にあるかをみておく。『四運動の理論』、『家庭・農業組合概論』、『産業および組合新世界』、『賈産業』といったフーリエのおもな著作の内容はほぼ一貫しており、おおざっぱに言えば、エゴイストないし家族エゴイストや利己主義、金儲け主義、労働忌避などが蔓延する現実社会の批判、その裏返しに相当する共同体ファランジュを社会の構成単位にした理想社会の素描、この現実社会と理想社会の両者を時間的かつ空間的に位置づける情念論を軸にした宇宙論、これら三つの部分で構成されている。それぞれの著作は、叙述の構成や説明の仕方、フーリエ固有の観念の完成度や、観念ないし用語の組み合わせ方、詳細さの程度、取り上げられる事例、といった点で少しずつ異なるものの、どの著作でも提示される観念や主張内容は大筋ではほぼ同じである。むしろ異様なまでに一貫しているといったほうが妥当かもしれない。時間がたつにつれて思考が展開していくというのではなく、最初期に全体の俯瞰、洞察あるいは透視があって、時の経過とともに説明のスタイルが変えられ、欠落部分が埋められ、事例が差し替えられたり、あるいは簡略化されたり冗長に論じられたりしていった。だから草稿もふくめた複数の著作にみられる同じ観念にかんするいくつもの説明が、読み手にはみな補完的なものになる。とはいえ、提示される観念相互の細かな関係を整合的にたどろうとすると、読み手はいつのまにか

観念の迷宮に迷い込み、矛盾に直面したり、堂々巡りにおちいったりすることが少なくないのだが。

ともあれ、理想社会の素描と現実社会の批判を一つの絵巻のなかに位置づける宇宙論の記述から、われわれはフーリエの根本思想と、ここでの「系列」の重要な役割を知ることができる。

フーリエの宇宙論の骨子はこうである。すなわち、自然は、神が数学の規則にのっとって物質に働きかけて事物を配置し、宇宙に五つの運動を発生させる。その運動の原理と、この原理がもたらす五つの運動の名称を、まずみよう⁷⁾。

運動の原理

1. 神 - 動かす能動の原理
2. 物質 - 動かされる受動の原理
3. 数学 - 裁定する中立の原理

運動の区分

- 一般的原型：数学（傍点筆者）
- | | |
|------|-------------|
| 中心運動 | 情念運動つまり社会運動 |
| 主要運動 | 本能運動 |
| | 有機運動 |
| | 香氣運動 |
| | 物質運動 |

このようにフーリエは、能動原理の神が、裁定原理の数学に則って受動原理の物質に働きかけて、情念運動ないし社会運動という一つの中心運動と、本能運動・有機運動・香氣運動・物質運動という四つの主要運動の、合計五つの運動をもたらすと考える。ただし、かれは上記の第3原理の数学と、中心運動の情念運動とを重要視する。

数学にかんしては、これが公正さと経済性のいわば象徴であるがゆえに、神の働きかけが数学と一致してこそ神の栄光と利益が実現される、とフーリエはいう。かれの言葉を引用しよ

7) Fourier, Charles, "Analogie et cosmogonie," *Manuscrits de Fourier*, 1848, *Œuvres*, t. XII, p. 160 sqq.

う⁸⁾。

「まず、神がみずから変えることができない数学規則にしたがえば、この数学との一致のなかで神自身の栄光と利益をみいだすことになる。神の栄光とは、神が宇宙を気まぐれによってではなく公正に統べていること、また、永久に変化をこうむらない法則に則って神が物質を動かすということを人間にたいして証明できるという点で。神の利益とは、神と数学との一致が、すべての運動のなかで最小の力で最大の効果を手に入れる手段を神にたいして提供するという点で。」

こういう理由から神が数学規則にしたがって物質に働きかけて運動をもたらすとフーリエはいう。とすると、当然すべての運動にその原型としての数学が刻印されることになる。だからこの数学をフーリエは「五つに分類される運動のすべてに共通する原型としての (pour type général) 数学の原理」と表現する (傍点は筆者による)。これが図中の「運動の区分」のすぐ下にある「一般的原型: 数学」の意味である。

つぎに、情念運動と他の四つの運動の関係に注目しよう。フーリエは、これら五つの運動についてこうのべている。

「この五つの運動のうちの一つである情念運動つまり社会運動は他の四つの運動の上位に位置する。情念は神自身の本質なのであって、動かす能動原理として神は、動かされる受動原理の物質よりも気高い。この関係と同じように、五つの運動の中でもっとも気高いのが神の本質をもっともおおく分有する運動である。それが情念運動ないし社会運動なのである。他の四つの運動は下位にむかうにしたがって情念とのつながりをじよじよにうしなう。情念とのつながりは本能運動でとても強いが、物質運動ではとても弱い。だから物質運動は神の本質ないし情念運動をもっともすくなくしか分有せず、運動のなかでは最下位なのである。」⁹⁾(傍点は筆者による)。

ここにみられる「情念は神自身の本質だ (Les

passions sont l'essence de Dieu même.)」という、情念と神を同一視するような記述は主要著作にはみあたらず、じつに興味深い。さらに、情念運動ないし社会運動と、本能運動、有機運動、香気運動、物質運動の四つの主要運動との関係も、情念の働きを分有する度合いからこの順位づけになっているのがわかる。ちなみに情念運動ないし社会運動については、「はじめに」で言及した「社会運動の推移表」と題された詳細な図が『四運動の理論』でしめされている。これら五つの運動が関与する内容は、すでに解明されている物質運動をのぞけば、どれも未開拓だとされるが、とりあえずフーリエが書きそえている各運動の内容項目をあげておこう。

情念運動または社会運動：諸運命すなわちさまざまな人間社会の階梯と機構

本能運動：動物の諸情念と諸本能

有機運動：生物の形態、器官、色、風味

香気運動：惑星間の親和力と交流、被造物の香気の管理

物質運動：万有引力と物質の仕組み

という具合である¹⁰⁾。

ところで、神が物質に働きかけて運動をうみだす場合、神の意図を伝えるのが「情念引力」だとフーリエはいう。かれはこの情念引力を、

9) Fourier, Ch., *op. cit.*, *Œuvres*, t. XII, p. 161. なお、『普遍統一の理論』では有機運動と香気運動の順位が、この草稿にみられるものと逆になっている。Cf. *Œuvres*, t. III, 248.

10) 情念運動以外の4運動の内容について、参考までに下記の記述を紹介しておく。有機運動：「動物の身体の構造、動物の骨の構造、筋肉と内臓の働き、この仕組みはすべて厳密に数学法則にしたがう」。本能運動：「ミツバチ、スズメバチ、ビーバー、クモは、労働するさいにはみな本能的数学者あって、数学法則からけっして離れない。これらの生き物は神に直接動かされ、野生の引力に従い、理性が介在しないが、神が有機運動や物質運動と同様に、本能運動を数学法則で統べるのは明らかだ」。香気運動：「私はまだ何も言っていない。その体系が知られていないからである。さしあたり、この著作で私が提示できるだろう概念を待ち受けなが

8) *Loc. cit.*, *QM.*, *Œuvres*, t. I, p. 31. n.b. 巖谷訳(上), 65頁。

たとえば「熟慮反省に先立って自然によってもたらされ、理性や義務や偏見等の反対にもかかわらず、いつまでも存続する衝動」と定義する¹¹⁾。あるいは「永遠の社会的啓示の羅針盤、理性の光が変化をこうむり間違いをおかすものであるのにたいして、時代と場所が変わってもつねに変わらずにありつづける衝動によって、永続的にわれわれをつきうごかす」のが情念引力なのである¹²⁾。

情念引力の定義にてでくる「衝動」は欲望や欲求とほぼ同義で、その欲望の対象に応じて三つに大別される。

- 第1 奢侈または富
- 第2 集団または愛情
- 第3 情念の機構

これら三つである。「情念引力」にかんする説明で『四運動の理論』や『普遍統一の理論』、『産業および組合の新世界』に共通する点をかいつまんでみておこう。

まず情念の第1の対象は五感を充足させるものである。第2の対象は集団つまり人との感情のつながりである。そして第3の対象は、五感の対象や感情のつながりを飽くことなく求め続ける仕組み、つまり情念の強さを維持更新する仕組みそのものが欲求の対象となる。情念は充足されてしまっただめなのである。情念は対象を渴望する状態を維持継続することが不可欠で、この渴望状態を維持する仕組みそのものが情念の求める対象になる。たとえば情念の移り気という面に注目し、そこを重視して情念の強さを維持更新する仕組みを工夫する。具体的に

は人がかかわる対象の選択肢をふやし、対象にかかわる時間を短時間化してつぎからつぎへ自分のかかわる対象を変えていくことで情念の更新をはかる仕組みである。ちなみに、その仕組みとして移り気情念を第一に考えた制度、すなわち、共同体ファランジュにおける短時間で作業場を変える短期就労型労働の組織や、婚姻期間を複数設定する多夫多妻制などが上げられる。こうした制度についてはここではふれない¹³⁾。

情念がめざす第2の対象は集団ないし人との感情のつながりである。情念にしたがって人びとがなんら制限を受けずに自由に行動すれば、かれらは自然に集団を形成する。フーリエはその様子をつぎのように描いている。

「ある集団は、人数が多くなると、みずから下位集団に再分割し、それら複数の下位集団が意見や嗜好の微妙なニュアンスにおうじて梯子状に段階づけられる、小隊にからなる系列 (une série de parties échelonnées) を形成する。7人の人間からなる小さな集団にあっても系列が形成されるのがみられる。2人、3人、2人に分かれた三つのニュアンスをもつ小隊があらわれる。その小集団が20人くらいの規模であれば、まもなく5人、6人、7人といった、意見や嗜好のニュアンスの異なる集まりが生まれるだろう。このように、あらゆる集団が系列を形成する、つまり属や種の差異の階梯を形成する傾向があるということは明らかなのである¹⁴⁾。」

このように、人間が自由に行動すれば集団を形成し、その集団はさらに小集団に分割され、それら小集団の配置に一定の構造がみられるよ

ら、香気にかんするわれわれの操作、雷鳴やガス、その他われわれの操作が数学法則に従う限りでしかうまくいかないということが理解される。香気が天体とそれらの交接をきわめて数学的につかさどり、香気の親和力で機制されると考えられる。」Fourier, Ch., *op. cit.*, *Œuvres*, t. XII, p. 165.

11) NMI, *Œuvres*, t. VI, p. 47. 田中訳, 495頁。

12) UU., *Œuvres*, t. III, p. 240.

13) 短期就労型の労働の組織については拙稿「シャルル・フーリエと共同性」、『経済学研究(北海道大学)』第35巻第3号, 1986年, 参照。ファランジュの多夫多妻制については, 同「シャルル・フーリエの「愛の新世界」と資産配分」(『経済学研究(北海道大学)』第39巻第4号, 1990年), および同「シャルル・フーリエと周期性」(『経済学研究(北海道大学)』第57巻第3号, 2007年), 参照。

14) NMI, *Œuvres*, t. VI, p. 48. 田中訳, 496頁。

うになるだろう、とフーリエはいう。本稿の「はじめに」で指摘しておいたように、こうして形成された集団は、もっともシンプルなかたちとして中心集団と両極集団という三つの小集団からなる。自然に形成されたこれら三つの集団は、それぞれが嗜好など同一性の関係でむすばれる。しかし中心集団と一方の極集団、および他方の極集団は、それぞれ中心集団と隣接するがゆえに、そのあいだで対抗心が刺激され、さらに中心集団の両側に位置する両極の集団がおたがいに手をむすんで中心集団に対抗する関係ができあがる。こうして中心と両極からなる集団の全体が、内部に対抗関係をはらむがゆえに、その三つの集団の個性を維持し、かつ同時に3集団全体に共通するレベルの同一性でまとまりをもつ。ちなみにフーリエは「両極集団の影響力は中心集団の影響力の2倍に等しくなる」や、「系列の仕組みには和合と同じ数の不和が必要だ」といった類の表現をよくつかうが¹⁵⁾、それはひとまとまりをなす全体の内部に対抗関係をはらませることによって、全体を構成する各集団が融合して同一化することなく、つまり差異の関係を維持しながら3集団全体のまとまりを維持強化するということであった。

ちなみに、フーリエには時事問題と系列の構造とを関連づけた記述はすくないものの、フーリエによるサン・シモニアン批判の文脈で面白い用例がある。そこでは、フーリエが設立をよびかけた1,600人規模の共同体ファランジュと、サン・シモニアンの説くアソシアシオンとがいかに違ったものであるかをのべ、さらにその違いを国民議会議員らのスケッチで例証していた。そこを紹介しておこう。

「300から400の家族を協同させるには、自然が自由な諸集団すべてについて用いている衝動という動因が採用される。自然はまずそれらの諸集団を対抗しあういくつかの集団に分割し、その分割された集団で階梯

つまり嗜好や党派の系列を形成する。これはサン・シモニアン倫理とは正反対だ。かれらの倫理は、組合員を、完璧に意見が統一された兄弟からなる一つの家族につくりあげるものである。自然はそんなことを望んではいない。自然の第一の衝動は、集団全体のなかに不和の階梯を打ち立て、その階梯を対抗し合う諸集団の系列に細分し、そこに属の不和、種の不和 (les discordes de genre et d'espèce) を生みだしていくことである。国民議会には3属か4属の党派(partis de genre)があって、それらの党派がいわゆる中心と両極を構成し、その中心と両極は12種ほどの小党派 (partis d'espèce) に細分される。それらの小党派は、「とんがり」、「出っ腹」といったあだ名や派閥の領袖の名前で識別される。こういうかたちこそ自然が望む配列であって、私はこれを段階づけられ対照的に関係づけられた系列、すなわち情念系列と名付ける¹⁶⁾。」

集団には不和ないし対抗が必要なのに、サン・シモニアンの説く集団にはそれが無い。自然がのぞむのは不和や対抗を内蔵した集団であって、議員集団の中心と両極の対抗の構造がその証左だというのであった。これが時事問題と系列構造を関連づけた数少ない用例の一つである。なお、引用中にみられる「属」「種」は、フーリエが博物学から援用したであろう分類学上の用語である。

ここですこし話を戻そう。ひとつうへの引用箇所にもみられる小集団の2人、3人、2人、あるいは5人、6人、7人といった人数の数字の列は、まさしく数列であって、原語ではセリー (série)、つまり系列である。フーリエは五つの運動をもたらす三つの原理のうちの第3原理を数学とし、かれ自身、この数学が幾何数列や幾何学などをさすとはいうものの、実質的には、集団を構成する人数、または集団を構成する小集団の数などの数字の列をさすと考えれば、フーリエの説明の多くが非常に理解しやすくなる。

そのような集団をフーリエは情念系列 (une

15) NMI, *Œuvres*, t. VI, p. 52-53.

16) Fourier, Charles, *Pièges et charlatanisme des deux sectes Saint-Simon et Owen*. Paris, 1831, p. 12.

série passionnée) または集団系列 (une série de groupes) とよんでいる。その系列の構造を説明する文脈に「情念系列とは、上昇列と下降列に梯子状に段階づけられたさまざまな集団の連合体である」、あるいは「自然は宇宙のあらゆる配列で集団系列をもちいている」といった表現がみられる¹⁷⁾。

こうした記述から、フーリエのいう運動の原理の働き方が、つまり第3原理の数学の意味合いがみえてくる。つまりフーリエのいう数学は、人間が自由な状態で形成する集団構成にみられる数字の列、あるいは集団の人員構成にみられる数字の列、すなわち系列をさしていたと考えるのが妥当だろう。ただし、神が数学に則って物質に働きかけるといとき、神と数学と情念の三者の関係は同義反復的で、それを整理するのは容易でない。ふたたびフーリエにきこう。

「たとえ数学が運動の鑄型あるいは原型 (moule ou type du mouvement) であっても、その中心は神つまり能動原理であって、すべては神に一致しなければならない。その結果、本能運動、有機運動、香気運動、物質運動の四つの運動は情念運動に一致させられねばならない。この情念運動は神の本質であって、数学的正義に結びついている。情念は生きた数学なのである (Les passions sont les mathématiques animées.)¹⁸⁾。」

情念が人間の集団形成を通して系列を目に見えるかたちであらわし、この系列を、神は運動を生みだすさいに鑄型ないし原型としてつかう。本質が情念である神は、情念引力をとおして系列の構造を運動に刻印していく。そしてその系列は命を宿した数学だといっているのである。フーリエにあっては神と情念と数学はほぼ同格であって、同じものをさしめず三様の表現だと考えればよいのかもしれない。フーリエのこうした宇宙観によれば、世界のいっさいに情念すなわち命を宿した数学あるいは系列のしるし

を読み取っていけるはずである。最後にもう一つ、フーリエの言葉をひいておこう。

「四つの基本運動は情念運動に照応するが、これら四つの各運動の作用は情念運動の作用と情念の特性の一覧表になるはずである。だから五つの運動の全体的な体系を研究し、そこで支配的になっている秩序の原因と目的を決定するには、すべての運動が照応している情念運動の体系を研究する必要がある。あらゆる被造物が情念運動の象形文字になっているからである。情念引力の分析と総合によって運動を研究する場合、数学法則を基礎にしなければならない。なぜなら数学法則は体系全体の原型、四つの基本運動が一致する情念運動そのものの原型なのだから¹⁹⁾。」

ともあれ、情念が宇宙をかたちづくるといふフーリエの根本思想において、系列が世界のいっさいのものの原型ないし鑄型になっているということ、したがってフーリエの宇宙論のなかで系列がきわめて重要な役割をになっていることが確認できたであろう。

Ⅲ. 文明のカースト

前節でみたように、系列がいっさいのものの原型ないし鑄型になっているとすると、フーリエが「文明のカーストおよび亜カーストの階梯」とよぶ当時の社会階層の構造にもこの系列の構造が刻印されているだろうか。

19) *Loc. cit.* これと同じ文脈でのべられている神と数学と情念の関係をしめす部分を、もうひとつここに紹介しておこう。「この三つの原理の同盟は、根本的に行為の統一をうちたてる。そして運動の操作における効果の統一を手に入れるために、神は、情念運動においてであれ物質運動においてであれ、象形文字による対応をふまえて (hiéroglyphiquement) 万物を創造しているにちがいない。神は、われわれ人間の情念であれ、本能や親和力のような動物の情念であれ、その情念を、数学の定理に結びつけなければならない。そして、運動のあらゆる帰結の中に、共通の原型 (le type général) を表現していかねばならないのである。だから数学の定理とは、数学と一体になった神の情念なのである。」Fourier, *op. cit.*, *Œuvres*, t. XII, p. 167.

17) *NMI, Œuvres*, t. VI, p. 52-53.

18) Fourier, *op. cit.*, *Œuvres*, t. XII, p. 161.

第I節の「はじめに」で、情念が自由に發揮されるなら、いっさいが系列構造を分有して統一が生まれ、世界は調和する。情念が抑圧されると系列構造に歪みが生じ、統一が乱れて世界は不和におちいる、とフーリエの根本思想をまとめた。つまりフーリエは世界の調和と不和とを情念の自由と抑圧に関連づけて考えているわけである。もちろん世界の調和がフーリエの理想であって、世界の不和はかれの批判の対象でもあった。この整理図式でいえば、文明社会は情念を抑圧する社会であって批判の対象となり、「文明のカーストおよび亜カーストの階梯」の階層構造は、ゆがんだ系列の構造を反映していると予想される。そうした文明のカーストと系列の構造との関連性ないし対応関係の分析は次節にゆずり、ここではまずフーリエの提示している「文明のカーストおよび亜カーストの階梯」をフーリエの主著の記述にそって具体的にみよう。

ただしそのまえに、フーリエがつねに念頭においていた経済的な階層の区分をみておく。フーリエは初期の著作『四運動の理論』からずっと段階的不平等の必要性を説き続けた。フーリエは極端な不平等、すなわち小数の富裕者と大多数の貧者という状況を批判するのだが、だからといってけっして平等を賞揚するわけではない。かれはフランス革命で急進派がめざした平等は社会に混乱をもたらしたと批判する。かれの理想は人びとの財産が梯子状に段階づけられるような不平等であった。それをフーリエは等比数列をつかって象徴的に表現する。まずこれをみよう。

	貧困	窮屈	普通	安楽	裕福
A	0	1	2	4	8
B	1	2	4	8	16
C	2	4	8	16	32
D	4	8	16	32	64
E	8	16	32	64	128

表の左端縦列のAからEまでは生産力の発展段階を示す。表の上端の行の「貧困」層から

「裕福」層までは各発展段階における五つの経済的な階層区分を示す。フーリエの説明では数字の単位はフランであるが、期間の記載もなく、実質的には生産力の発展段階に応じた階層別の分配比率ととらえればよいだろう。古代社会のAでは生産水準が低くて経済的不平等もあまり目立たず、しかもフーリエによれば、表にみられる分配がゼロの貧困階層は存在しなかったという。だがB段階からE段階へと生産力が増大し、E段階つまり現在の文明社会になると、各階層への分配比率は最下行の8フランから128フランではなく、表の対角線上に、すなわち0, 2, 8, 32, 128フランになり、階層間の極端な経済格差つまり豊かさの中の貧困が生じる。そしてフーリエはE行の等比数列をファランジュにおける分配のあるべき比率と考えているのである。フーリエがどの著作でも口癖のようにくりかえしいう「段階づけられた不平等」とはこのE行で示される分配比率をさしていたのである²⁰⁾。

さて、フーリエは、左表の対角線上の分配比率で示される極端な経済格差の階層に、アンシャン・レジームの身分制をかさねてそれを「文明のカーストおよび亜カーストの階梯」とよぶ。このカーストは世襲の身分や職業におうじて大きく七つに区分され、細区分をいれると合計16の階層からなる。それをすこし簡略化

20) NMI, *Œuvres*, t.VI, p. 34. 田中訳 479 頁。フーリエが理想視する段階づけられた不平等は、具体的にデザインされてはいる。たとえば「三目九属の株式」というかたちで、共同体ファランジュの成員が保有できる株式を制限することをフーリエは考えていた。これについては拙稿「シャルル・フーリエと階級調和の方策—「資本」の分配を中心に—」(『経済学研究(北海道大学)』第37巻第2号, 1987年, 参照。なお、フーリエは理想社会で富裕層が貧困層に所得を移転したり、労働や性愛を介して結ばれた貧者に「分散相続」で遺産を分与したりすることを考えた。そんな再分配が共同体の一体化幻想を強化すると考えていたようである。それには再分配後も経済格差が要請されるはずである。

して紹介する。

文明のカーストと亜カーストの階梯

諸カースト	諸階梯	産業
宮廷	機軸	快楽
聖職者	上位移行部	信仰
貴族	1. 2. 3. 4.	魅力的産業
ブルジョワジー	5. 6. 7. 8. 9.	両義的産業
平民	10. 11. 12.	嫌悪を催す産業
召使	下位移行部	単一奴隷
兵隊	反機軸	複合奴隷

以下、この図についてみていこう。

まずフーリエは、上図の左から2列目の「諸カースト (Castes)」にあるように、文明社会の階層を宮廷、聖職者、貴族、ブルジョワジー、平民、召使い、兵隊、の七つのカーストに区分する。そのうち貴族とブルジョワジーと平民については、左から3列目の「諸階梯 (Échelons)」の数字が示すように、それぞれを四つ、五つ、三つの「亜カースト」に細分する。これらの亜カーストについてもフーリエは具体的な名称をあげている。なお、図の右端の産業欄の記述にかんしてフーリエは説明していない。

その各名称は、『普遍統一の理論』とその要約版である『産業および組合新世界』の二つの著作で完全に一致しているわけではないが、その両者における説明を参照しつつ整理すると、こうなる²¹⁾。

まず貴族カーストは、つぎの四つの亜カーストに細分される。すなわち、

1. 宮廷貴族
2. 新興貴族
3. 帯剣貴族
4. 法服貴族

(地方領主、貧乏貴族、買爵貴族)

つぎにブルジョワジーは五つの亜カーストに細分される。すなわち、

5. 銀行家や金融家
6. 被選挙資格を誇る大商人や大地主

7. 選挙権しかない商人や地主
(小商人や小地主)
8. 学者や法律家やその他の(公的な管理下にある)俸給か聖式謝礼か小領地で生活する人々
(これらの収入を得ている人は選挙資格なし)
9. 小商人や田舎商人
(下層ブルジョワ)

最後に平民カーストは三つの亜カーストに細分される。すなわち、

10. 高層平民
(農場主、小売店主)
11. 中層平民
(職人、小農民)
12. 汚い仕事をする下層平民、賃金労働者
(義務組合、職人組合、賤民)

以上のようにフーリエは、文明社会の階層構造を七つのカーストと12の亜カースト、合計16のカーストでとらえる。さらにかねは、それら12の亜カーストのあいだで観察される感情的関係についてつぎのように描写する。

「(水切り遊びで)力いっぱい投げ入れた石が規則正しく水面を切っていくように、上のカーストからすぐ下のカーストに、この下のカーストからまたそのすぐ下のカーストに、つぎからつぎへ軽蔑の感情がむけられていく。これにたいして、その軽蔑の連鎖とびったり重なるかたちで、けれども逆の方向に、つまり下のカーストからすぐ上のカーストへ、つぎからつぎへと憎しみの感情がむけられていく」[()内は筆者による]²²⁾。

こうした憎しみの連鎖と軽蔑の連鎖は「憎しみの上昇階梯と軽蔑の下降階梯」とも表現される。

このように亜カーストのあいだでは、それぞれのカーストがそのすぐ下のカーストを蔑む一方で、そのすぐ上のカーストを憎む。上下に隣

21) UU, *Œuvres*, t.V, pp. 388-390., NMI, *Œuvres*, t.VI, pp. 324-325. ()内では『産業および組合新世界』にある表現を補った。

22) UU, *Œuvres*, t.V, p. 389.

接するカーストのあいだで、軽蔑の感情が上のカーストから下のカーストにとぎれることなくむけられ、同時にそれとは逆向きに、憎しみの感情が下のカーストからそのすぐ上のカーストにとぎれることなくむけられる。フーリエはカーストの階層のあいだにある感情の関係をこのようにとらえ、亜カーストにおける下向きの蔑みの連鎖と、上向きの憎しみの連鎖をみいだしたのである。

そうした蔑みと憎しみの感情の連鎖の素描について、フーリエは、中層部のカーストををさんで上側と下側に位置する上層部カーストと下層部カーストとの関係についても言及している。

「すべてのカーストのあいだに規則正しい憎しみの連鎖が存在する。つまり第8カーストが第7カーストを憎むのと同じように、第9カーストが第8カーストを憎むという状況である。それぞれのカーストは、友情ではなく野心から、自分より上のカーストとどんなに交流を深めても、そうした憎しみの連鎖はかわらない。

われわれの政治や道徳をあつかう学問が文明で打ちだした甘い友情などこんなものである。たしかにそこには友情にみちた協調のかすかな兆しがみられる。たとえば貴族が賤民を庇護するナポリ、あるいは高位聖職者が乞食を庇護するスペイン、といったあまり統治状態のよくない国で見られるように、ときとして大貴族が下層カーストの人間と友になる。だが第1亜カーストと第12亜カーストといった両極のカーストの接近は害悪の源泉でしかない。たとえそれらのカーストの接近が産業と一般的な幸福に役立つにしても、誠実な友情から生じたのではなく社会の混乱がもたらしたものでしかない。

友情以外の別の三つの情念による協調についても同じような害悪を分析しよう。たとえば恋愛によるカーストの協調。大貴族が平民階層の女性と恋に陥っても、そこからは道徳の混乱しか生まれず、二つのカーストのあいだの接近は生じないだろう。たとえ恋して子供が生まれても、その子供たちが認知されなければ混乱が増すばかりなのだ。子供の誕生が結婚つまり格差の大きい家族の協調につながっても、それは一族内の分家同士の不和や対立のあらたな火種になる。こうしたあらゆる協調は混乱や利己主義、さらに二心のふ

るまいをもたらすばかりである。

野心情念による協調でも恋愛の場合と同じである。富裕層が平民層と接近する場合、それは全体の安寧には有害な陰謀や党派の策謀、さらには圧制をしつ結託などを持ちかけるためである。したがって文明社会は、善行とされる事柄からは、とりわけ格差のあるカーストの接近からは害悪しか生みださせないのである。つまり格差のあるカーストの協調にかすかに希望の光があるにしても、文明社会では異なるカーストの接近は社会に不和の種を蒔き散らすことにしかつながらないのである²³⁾。」

いささか引用が長くなったが、フーリエによれば、各カーストのあいだに憎しみと軽蔑の連鎖があると同時、相互にかけはなれたカーストが接近したかのようにみえても、その接近は結局トラブルのもとでしかないというわけである。

以上のようにフーリエは、上下に隣接するカーストの関係と、相互にはなれたカーストの関係についてのべたあと、中心部に位置するカーストと上層部のカーストおよび下層部のカーストとの関係についても論じる。そのさいフランス革命とナポレオンのロシア遠征といった出来事と、中層部カーストに属する政論家ないし法律家と商人らの動きに注目する。ここで政論家や法律家というのは、社会契約や人民投票を主張して政府を転覆させることしか考えていない連中をさし、商人のほうは社会的混乱は忌避しながらも、買い占めによる飢饉の演出などで結局は政治を揺るがす連中をさしている。フーリエの分析をみよう。

「平等の友は宮廷つまり機軸カースト、そして第1亜カーストの高位の貴族、大地主、これらの上層カーストを襲奪したが。商業の友は下層カースト、たとえば第12亜カーストの平民を襲奪したが。それは買い占めや作爲的飢饉、商品の変造、原料不足、産業や平民の生計を妨害するといったやり方でおこなわれる。さらに軍隊を飢えさせるというやり方は、反機軸

23) *Ibid.*, pp. 390-391.

の兵隊を打ちのめす。小売り商人や軍隊と取り引きする商業の友の目的はこうしたものである。彼らはもっぱら軍隊を飢えさせ兵隊から食べ物を奪っては稼いでいるのである。

平等の友は無限大階層つまり機軸カーストの宮廷、およびこれに隣接する第1亜カーストを攻撃する。

商業の友は無限小階層つまり反機軸階層の兵隊、およびこれに隣接する第12亜カーストの平民を攻撃する。

形態は異なるが内容は同じのこれら二種類の扇動者の間には、同じ害悪が、両極にあるカーストの一方から社会体制を攻撃する同じ策略がある。

このやり方は、われわれの世代で2回うまくいった。政治結社の成員は、機軸階層の王位を直接攻撃してルイ16世を転覆させた。商人らは、反機軸階層つまり平民や軍隊になされた逆攻撃によってナポレオンを転覆させた。1812年の作為的飢饉は遠征を遅らせることによって、ロシアにたいしてトルコと和解する時間を与えてしまった。この遅滞が遠征を失敗させることになり、王位篡奪者ナポレオンの失脚を導いた。商業の友はボナパルトにたいしてこの飢饉を組織したが、ルイ16世にたいしても同様に飢饉を組織したであろう。商業は神も認めなければ皇太子も認めず、盲目的な略奪本能によってしか動かされない。もし商業が毎年飢饉を組織しなければ、それは商業にそれができないということだ²⁴⁾。

政治結社員が平等の名のもとに宮廷や貴族といった上層カーストを篡奪し、かたや商人らは作為的な飢饉によって兵隊や平民といった下層カーストを篡奪する。この政治結社員や商人が属するのは文明のカーストの中心部分に位置するブルジョア階層であった。この中心カーストが両極のカーストを篡奪しているという構図をフーリエは浮き彫りにしたのである。

ともあれ以上がフーリエの「文明のカーストおよび亜カーストの階梯」の具体的な内容である。

IV. 「系列」と「文明のカースト」

前節では「文明のカーストおよび亜カーストの階梯」を具体的に論じてきたが、ここから一転して「系列」の構造にかんするきわめて抽象

的な議論を検討しよう。第I節では「上昇翼、中心、下降翼」といった集団の区分を、そして第II節では「中心と両極」といった集団の区分を「系列」の構造として紹介した。フーリエは、「基本共感と基本反感の体系」と題された草稿の中で、その区分の単位としての集団を項(terme)とよびかえ、その諸項からなる系列の構造を、諸項のあいだに作用するはずの共感と反感から説明する。筆者がこの説明に注目するのは、系列における共感と反感のありようを「肌感覚でわかるような譬えをつかって識別していこう」といってフーリエが取り上げる事例が、まさしく「文明のカースト」にほかならないからである。カーストの事例といっても、14行ほどで1頁の半分くらいを占めるにすぎない。だが、すくなくとも「系列」構造を抽象的に論じてから、それを下敷きにして「文明のカースト」を論じるという点に注目したいのである。

さて、フーリエのきわめて抽象的な説明をみるまえに、「系列」について、ここでとりあえず「特定の構造をそなえ、その構造を構成する諸項のあいだに誘引する力(共感)と反発する力(反感)が作用し均衡することによって、その構造の全体が維持されるような構造体」とでも定義しておこう。

フーリエはひとつの中心項と両極項からなる系列の構造モデルを提示する²⁵⁾。

左の列のアルファベットは階梯状に段階づけ

系列の構造モデル

m	隔絶項または分裂項
X	上昇両義項
a	端緒ないし噴出と激昂の項
b	
c	
d	中心項
e	
f	
g	終結ないし枯渇と退化の項
Y	下降両義項
n	隔絶項または分裂項

24) *Ibid.*, pp. 422-424.

25) Fourier, Charles, "système des sympathies

られた事象のそれぞれ、つまり系列の構成要素をあらわし、フーリエはそれらをここでは諸項 (termes) とよぶ。このアルファベットの右側にある名称は、第Ⅱ節の「文明のカーストおよび重カーストの階梯」の図のなかにあった「諸階梯」と、用語は異なるものの、意味は系列における位置をあらわすものとしてほぼ同じと考えられる。

上昇両義項の X と下降両義項の Y は、この系列を、ここには記されていない別の系列に接続しつつ、この系列にも、またこの系列に隣接する別の系列にも帰属しない。とはいえ X と Y とは、隣接し合うどちらの系列にとっても不可欠な項である。この X と Y は、隣接するどちらの系列の項とも共感の関係でもないし反感の関係でもない。まさに中立的な項である。

また、上昇両義項の X をこえた上側に隣接するであろう別の系列のはじめには隔絶項の m がある。一方、下降両義項の Y をこえた下側に隣接するであろう別の系列のはじめにも隔絶項の n がある。この m と n はそれぞれ、X と Y のあいだにある系列のすべての項と反感の関係にあるとされる。

さらに、隔絶項をこえて、この系列の外側の上方と下方向に続くであろう別の系列の項へと進んでいけば、このもとの系列の諸項と、それに隣接する別の系列の諸項とのあいだで反感は増大していく。隔絶項は、その項自体がこのもとの系列の諸項と隔絶 (反感) の関係にあるといっても、まだかすかな親和力を保持している。つまり隔絶項が系列のまとまりをたもつ限界点といえよう。

ところで、フーリエは系列の階梯のひとつに「移行部 (la transition)」というものをあげる。移行部とは、ひとつの系列とそれに隣接するもうひとつ別の系列との境界部分を指す。

フーリエは、この部分の構造を、蛇の系列と川魚の系列の境界部分に注目し、そこに位置する水蛇とウナギとカワメンタイという三種の水棲生物を例にして説明している。

移行部の構造

-	(蛇系列の諸項)
水蛇	(蛇系列の端緒項ないし噴出項、川魚系列にとっての隔絶項)
ウナギ	(両義項)
カワメンタイ	(川魚系列の終結項ないし枯渴項、蛇系列にとっての隔絶項)
-	(川魚系列の諸項)

フーリエによれば、移行部は、すでにみた系列の諸項の名称でいえば、端緒項と両義項と終結項の三つで構成される。まずウナギが魚でも蛇でもない両義項に位置づけられる。カワメンタイは、その形や味わいがウナギに近いので、川魚の系列の終結項に位置付けられる。水蛇は、ウナギをあいだにはさんで川魚系列の魚にもっとも近いので、蛇系列の端緒項に位置づけられる。カワメンタイは、ウナギをあいだにはさんで蛇系列の蛇にもっとも近いので、蛇系列にとって隔絶項になる。水蛇は、それ自体が川魚種族の隔絶項であって川魚とはまったく異質であっても棲息場所については同じなので、水蛇はまだ川魚系列とかすかな親和性を保持しているという。だが、水蛇をこえて蛇系列に入っていけば水中という棲息場所の同質性はなくなり、親和性が消滅して川魚系列の項との反感は増すばかりになる。

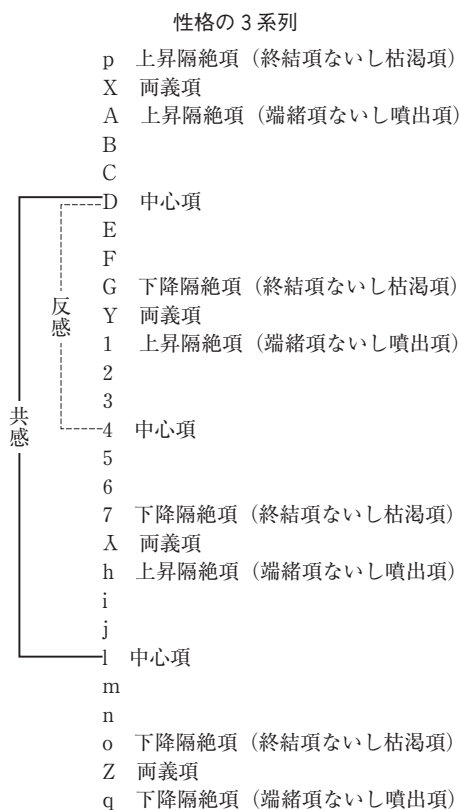
このようにフーリエは川魚と蛇とがどう区別されるかを、系列を構成する諸項の共感または親和力と反感の作用で説明している。ただし、この説明の中で、たとえば「生息場所の同質性」といった表現はみられるものの、それ以外に、蛇を蛇とする性質や川魚を川魚とする性質にかんする規定はなく、種差をしめす徴表の規定もない。とはいえ、系列あるいは諸系列の構造全体が、いわば類と種の間を維持する装置であって、そこで移行部が重要な役割をになっ

et antipathies radicals." *Manuscrits de Charles Fourier*, Paris, 1818, *Œuvres*, t. XI, p. 31. 2^e pagination.

ているといえそうである²⁶⁾。

以上のような系列の基本構造をふまえて、フリーエは、さらにこの系列を三つつなげた構造モデルを提示する。つぎにこれをみよう。

フリーエは人間の性格にかんする三つの系列を想定し、それらの諸項のあいだの反発つまり反感の関係と、誘引つまり共感の関係とのシステマティックな説明をこころみる。まず、極度に誠実な性格から極度に移り気な性格にいたるまで連続的に段階づけられた性格の人物が27人いると想定する。いいかえると、その27人の人びとを、極端な誠実さからはじまって、じょじょに誠実さが減少し、つぎに誠実さにかわって移り気がじょじょに増大し、ついに極端な移り気に終わるようにならべ、さらにそれらの人びとを諸項とする三つの連続系列を想定する、ということである。極端に誠実な性格の人をpで、極端に移り気な性格の人をqであら



わし、その27人の人びとを段階づけられた性格の順に三つの系列に区分して連続的にならべると、左下図のように示される。

ここで図中の記号を確認しておこう。まずD項、4項、1項はそれぞれ第1系列、第2系列、第3系列の「中心」である。

A項とG項、1項と7項、h項とo項、p項とq項は、それぞれ上昇隔絶項と下降隔絶項である。

A項、1項、h項、q項は、みな端緒項ないし噴出項で、p項、G項、7項、o項は、みな終結項ないし枯渇項である。

Gとh項は第2系列全体にとって隔絶項ないし反感項であり、p項と1項は第1系列全体にとって隔絶項ないし反感項であり、7項とq項は第3系列全体にとって隔絶項ないし反感項である。

以上、図の中の記号表記を確認したが、フリーエはこれらの項のあいだに反感の関係と共感の関係を規定している。そこでつぎに、これらの関係をみよう。

個々の反感のなかでもっとも強い反感の関係が、D項と4項(図中のDと4を結ぶ破線)、E項と5項、F項と6項、G項と7項とのあいだなどにみられる。つまり、ある項ともう一つの項のあいだに七つの項をはさんだ距離にある項同士のあいだでもっとも強い反感の関係がみられるということである。

他方、第1系列の中心であるD項は、第3系列の中心である1項と共感の関係にある(図中のDと1を結ぶ太い実線)。すぐ上でみたように、D項は第2系列の中心の4項と強い反感の関係にあり、第3系列の1項はその4項よりも移り気の度合いがいっそう強いのだが、それにもかかわらずD項はこの1項と誘引しあう共感の関係にあるという。フリーエがその理由としてあげるのが、「両極は相通じる」あるいは「両極の一致」という諺であった。第1系列と

26) *Ibid.*, pp. 31-33.

第3系列とは、そのあいだに第2系列（原文は第3系列）が介在することで引き離され、その結果うまれる第1系列の項と第3系列の項のあいだの距離をもってこれらの二つの系列を「両極」と規定する。この両極のあいだの距離を「対照性」の関係にとらえ、フーリエはこの対照性を共感の根拠とするのである。この例では、D項とI項のあいだには項が15個あり、この15個分の距離でしめされるような誠実さと移り気の性格の違いが対照性の具体的な内容になる。

この共感の根拠として「対照性」の関係を指摘したいま、再度、反感の根拠についても「隣接性 (la contiguïté)」があげられることを指摘しておこう。さきにある項ともう一つの項のあいだに七つの項をはさんだ距離にある項同士のあいだでもっとも強い反感の関係がみられるとのべたが、この項の7個分でしめされる距離が、フーリエのいう「隣接性」に相当するわけである。

最後に、両義項にかんする共感と反感の関係をみよう。これについてはいささか複雑である。いま第1系列の両義項Yを例にとって説明しよう。まずYと第1系列の諸項との関係をみると、両義項Yは、G項、F項、E項と進むにつれて共感の関係がじょじょにうすれ、第1系列の中心のD項とは共感の関係は消滅して中立的な関係になる。そしてこのD項をこえてC項とは反感の関係が生じ、B項、A項と進むにつれて反感は段階的に強まる。そして両義項Xとはもっとも強い反感の関係になる。一方、第2系列の諸項との関係をみると、両義項Yら、隣接する1項、2項、3項と進むにつれて共感の関係が弱くなり、第2系列の中心の4項とは中立的な関係になる。そしてこの4項をこえて5項、6項、7項と進むにつれて反感の関係がじょじょに強くなり、つぎの両義項のIとはもっとも強い反感の関係になる。けれどもこのIをこえて第3系列のh項からo項にいたるまでふたたび共感の関係が段階的

に強まり、両義項Zにいたって完全な共感が成立するという。

こうした共感と反感の関係は、どの両義項からみても同じパターンである。すなわち、ある両義項は、隣接する系列の諸項と共感するが、その共感はいよよに弱まり、隣接系列の中心項にいたっては共感が消滅して中立的な関係になる。その中心項をこえていくとそこにある諸項と反感の関係をじょじょに強め、つぎの両義項にいたって反感の関係が最大になる。それをこえるとふたたび共感の関係が強まり、そのつぎの両義項とは完全な共感関係（両極の一致）になる²⁷⁾。

このように、誠実さから移り気にいる段階づけられた27人の性格の三つの系列、合計27項の共感と反感の関係が説明される。なお、ここでフーリエが提示している三つの系列は相同的で、両義項をのぞくと三つとも七つに区分される性格で構成される。けれどもフーリエによれば、そんな相同的な配分はじっさいにはありえず、たとえば5性格、7性格、9性格のような数的「累進」の配分が自然だと指摘している。

ともあれ、系列の項の位置をしめす「隔絶項」や「両義項」などのフーリエ独特の分類用語を使いながら、かれは文明のカーストについて、つぎのようにのべている。

「王子は富裕で、百姓は貧乏である。けれども王子は綺麗な身なりをした村人や、安楽な生活をおくる農民を愛するだろう。そして王子は中間階層すなわちブルジョワ階層よりもこの階層を好むだろう。百姓の良識は、王子にとっては商店主のおもねりよりもずっと好ましいだろう。なぜなら王子と農民の対照性は、調和的な関係のなかの対立の段階にあるからである。しかし、もし人びとが階梯をもう少し下降すれば、もし王子が貧しい百姓のところ连接到行かれれば、王子は興奮するだろう（親和力の枯渇項ないし終結項）。もし王子が不品行な職人のところ连接到行かれれば、王子はうんざりする気持ちを感じるだろう（両義項な

27) *Ibid.*, pp. 33-35.

いし出口項)。もし王子が、ぼろをまとった乞食のところに連れて行かれれば、王子は嫌悪感や恐怖感を経験するだろう(隔絶項ないし分裂項)。

共感階梯のこの系列は、共感についてのすべての計算において各段階に階梯付けられた一覧表をもちいる必要性を示している。より規則的な方法が私にしめされれば、私はそれを使いたい²⁸⁾。」

さきの性格の3系列のモデルでは、系列構造をなす項相互の対照と隣接の関係と、それに依拠してはたらく共感と反感の関係が論じられた。そしてかならずしも厳密とはいえないものの、そうした共感と反感の関係が、王子と安楽な農民、王子と貧しい農民、そして王子と乞食の関係をみるうえで、基本パターンとして援用されていることがフーリエの記述から確認できた。

V. おわりに

さて、本稿の第Ⅱ節では、フーリエの宇宙論から、情念が人間の集団形成の行動をとおして「中心と両極」からなる「系列」構造をあらわし、この「系列」が世界のいっさいのもの「原型」ないし「鋳型」になっているということを確認した。つぎに第Ⅲ節で「文明のカーストおよび亜カーストの階梯」の全体像を具体的に検討した。カースト階層のあいだには軽蔑と憎しみの連鎖がある。中心階層の政論家は平等の名のもとに宮廷を篡奪し、商人は買い占めなどで平民や兵隊を篡奪する。だから中心階層が両極の階層を篡奪する構図も浮き彫りになった。

最後の第Ⅳ節では、草稿にあるいささか抽象的な系列論を検討した。そこで系列における共感・反感の作用をみて、それをふまえたカーストへの言及を検討した。まず、系列の構造のなかで作用する共感と反感がどうなっているか、いいかえれば引き合う力と反発し合う力がどう均衡して系列の構造を維持しているかをみた。

このいささか抽象的な説明をへてフーリエは川魚系列と蛇系列の移行部における分類の考え方をのべる。ついで誠実から移り気にいたる性格の系列をモデル化し、共感と反感の働きを原理レベルで規定した。この系列の原理論を具体的に説明するために「肌感覚でわかるような譬え」でとりあげた事例が、まさしく「文明のカースト」にほかならなかった。こうして「文明のカーストと亜カーストの階梯」が「系列」であることが判明した。ここでのカーストへの言及は短いものの、「系列」の構造を抽象的に論じてから、その原理論を援用するかたちでカースト論を展開している点に注目したい。

第Ⅲ節でみたように、「文明のカースト」の内部では憎しみや軽蔑などネガティブな感情の関係が支配的であったが、すくなくともフーリエがそれらを論じる構図のなかに、系列の構造と働きを確認することができたといえよう。

以上、本稿では、「文明のカーストおよび亜カーストの階梯」の階層構造と系列構造との対応関係を確認するこれまでの作業をもって、フーリエが観念を成形するとき、系列の構造を鋳型にして情報を分類・編集していること、そしてフーリエのいう「観念の貯蔵庫」には観念ではなく「系列」が内蔵されていて、かれはこの系列を原型ないし鋳型にして観念をつぎつぎに成形していた、とする筆者の解釈の傍証としたい。

謝辞：本稿の作成にあたって小樽商科大学附属図書館所蔵、大西・手塚記念文庫の蔵書を利用させていただいた。図書館のスタッフの方々にこの場を借りて心よりお礼を申し上げたい。

28) *Ibid.*, p. 59.